
緋色の眼～ＬＯＶＥ×ＬＩＫＥ×ＬＩＦＥ～

ジョン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋色の眼～LOVE×LIKE×LIFE～

【Zコード】

Z7941K

【作者名】

ジョン

【あらすじ】

俺の名前は千島蒼一。図書部なんていう、暗く地味で生産性が力ケラも存在しない部活に在籍している何処にでも居るような高校生だ。図書部には少ないながらも俺の仲間が居る。甘党の双子の妹。肉大好きなクラス委員。苛められっ子とリア充の中間に居るような馬鹿。魔術とか中二的なものが大好きな先輩。そして、恋愛を司る神様。ちなみに言っておくと、これはもしもの物語だ。実際にはありえねえ話だ。詳しくは内容を読んでくれ。そして、笑ってやれ。こんな短編を今更投稿した作者の無能を。

(前書き)

A-Fネタで書いてたものです。死にたい。

これはもしもの物語。

作者が入社研修の途中なのにありがたいお言葉を半分聞き流しながら生まれた物語。

本当はエイプリルフールネタでやりたかった物語。投稿日時を見てわかるように完全に時期を外した物語。

なんていうか、書いてちよつとイラつときた物語。研修中先のホテルに缶詰状態で毎晩寝るまで書いてる物語。

そして、

緋色の眼シリーズの女の子の大半と恋愛フラグがマックスになっちゃつた主人公の物語。

本来のお話では主人公とある一名以外にはモテません。
基本クールを気取った感じで今回は描かれてますが、本編では
もつと根暗ですぐれます。

あくまでA-Fネタです。かなりキャラの違う人が大半です。
本編は中一病要素の強い、現代ファンタジーです。地味に暗い話です。

千島蒼一。年齢16歳。身長は175センチと若干高め。体は引き締まつた細身。

黒い髪に悪い目つき。顔はどちらかといえば中性的。簡単に言つてしまえば、イケメンの部類に入る。

そんな恵まれた容姿を持つ男だ。家族は四人家族。両親に双子の妹。

現在は柳学院高校一年生。交友関係は狭く深く。趣味は読書と筋トレ。そんな、典型的なリア充だ。

「お兄ちゃん。起きて」

「うーん……」

「おにいちゃん!」

体をゆさゆさと揺ゆぶられ、千島蒼一は目を覚ました。目に映つたのは見慣れた白を基調とした部屋。

そして、少しだけ照れたような顔で自分を覗き込んでいる妹千島遥緋の顔だった。

「……つこす

「おはよ。ママがもう朝ごはん出来てるって。一緒に行く」

「ああ……」

遙緋に手を握られて蒼一はベッドから起きた。そのまま手を引つ張られ、階段を下りて一階のキッチンまで連れて行かれる蒼一。すると、一人の母親である千島遙が丁度朝食を並べ終えた所だった。

「おはよー、蒼一。遙緋。一人は今日も仲良しだんなね」

「ハハハ笑いながら遙が言つと、遙緋は顔を赤くして蒼一の手を離した。

何時もの事なので、蒼一は特に反応を見せる事なく、席について牛乳を飲み始めた。

「もへ、お兄ちゃん。口の周りに牛乳がついてるよ。」

「あ

遙緋がティッシュを手にとつて蒼一の口を拭いた。ビリとなく、楽しそうなのは気のせい。

「それで、お兄ちゃん。昨日は何時まで夜更かししてたの？」

「秋月先輩と部活の件で話してたら、遅くなつてしまつてな。それから宿題やつたから、寝たのは三時だ」

「ふうん……部活ねえ」

途端に不機嫌な顔になる遙緋。意味がわからない蒼一は若干緊張しながらも会話を続けた。

「お前も一応、図書部なんだから顔出せよ」

「てゆーか、お兄ちゃんが無理やり私を入部させたんじゃない。数あわせとして」

「仕方ない。そもそも遙緋がいいわけ」

「何？ そんなに秋月先輩がいいわけ？」

「何の話だ？ 秋月先輩は変わってるけど悪人じゃないぞ」

「うううそー たまー」

強引に遙緋は話を区切つて、さっさと部屋に戻ってしまった。これだから、女は難しい。

何処か遠い田で、母が置いていったコーヒーを飲みながらぼんやりと蒼一はそんな事を考えた。

怒った遙緋がさつと学校に行ってしまったので、仕方なく蒼一は学校への道を一人で歩いていた。

季節は夏。日差しが強い。暑いのがあまり好きではない蒼一はフラフラと頬りなく歩く。

すると、背後からたたか元気よく走る音が聞こえた。それと共に、

「蒼一さん！」

声をかけられた。よく知った声なので蒼一も足を止めて振り向く。

「よお、梨香。今日も元気だな」

田の前にいるのはセミロングの髪の小柄な少女だ。名は浅葱梨香。蒼一達の両親の親友の子供である。

中学、高校、大学まである柳学院の中等部に通つており、蒼一達ともよく遊ぶ。

梨香は走つてきたのに、息一つ乱さず今日も元気にして笑いながら、カバンから袋を取り出した。

「これ、昨日焼いたクッキーです！ よかつたら休み時間にでも

「おー。梨香の作った菓子は美味しいからな。大事に食べさせてもらひわ

「ありがとうございます！ じゃ、私今日田直なので先に行きますね」

それだけ早口で言つと「あやー」と変な声を上げながら梨香は去つていってしまった。何も知らない蒼一は

能天気に梨香は今日も元気だなと感心している。そのまま梨香に元気を貰つたような気がしたので

ちょっと走つてみる気になつた。気合を入れて、全力で走つてみると、

「うわ！」

「ひやあ！」

曲がり角から急に曲がつてきた人と走つていた蒼一は見事にぶつかつた。

慌てて謝るうとする蒼一だったが、それよりも早く、ぶつかつた相手の罵声が飛んできた。

「ちょっとアンタ！ 何処に田えつけて歩いてんのよー！」

「いや、走つてたぞ」

「そういう問題じゃない！」

何なんだコイツは。蒼一は田の前でぎゃんぎゃん喰く少女を見た。童顔でショートカットのチビ。

それが第一印象。何処か舌足らずな声で喋る事から、蒼一は中等部の生徒だらうと判断した。

「確かに俺が悪かった。だがな、お前。先輩にはある程度敬語使わなきゃ駄目だぞ」

「うーる・ぬーそーいー！ 私はちゃんと人を見るもんねーー！」

それだけ言って嫌味つたらしく笑うと、少女は物凄い速さで学校の方へと走って行った。

何故だか、屈辱感だけが残り、

「あのガキ……次会つたらただじゃおかねえ」

そう毒を吐いて蒼一も学校へと小走りで向かった。

そして、始業チャイムギリギリで教室の前まで辿り着くと、黒髪をポニー テールにした

背の高い女子がドアの前で仁王立ちしていた。

「おっす、由加」

「おはよー、蒼ー！……まあ、今日の遅刻はギリギリ見逃してあげる」

「流石だ！」

珍しく機嫌よく蒼一は笑うと、由加の横を抜けて教室へと入った。すると、それとほぼ同時に

髪を金色に染めて制服を着崩した生徒が慌てて教室に駆け込もうとした。

「いえー！ ギリギリセーフpuge！」

だが、教室に入ろうとした瞬間由加の蹴りが顔面に炸裂し、金髪の生徒 棚名神璽は廊下で沈黙した。

「相変わらずえげつねえな。幼馴染なんだろ?」

「それはそれ。これはこれ。蒼一は特別だよ」

由加はそう言つと、胸に指を当てて悪戯っぽく笑つた。

神璽が半泣きで廊下に立たされている中、蒼一達のクラスの担任が来てHRが始まった。

蒼一達の担任はまだ若い。24歳の物理教師だ。名前は、八神律。柳学院高校でも飛びぬけて変な教師だ。

何故かといつと、

「やあ、生徒諸君おはよつ。今日もいゝ天氣だね。では、H.R.の前に先生は一言言いたいわけだ。

実は今日、私の旦那様。八神時雨の22歳の誕生日だ。

皆、是非今日中に一回はハッピーバースデーの歌を歌つてくれたまえ。ディア時雨じゃなくて時雨さんな。

やはり時雨を呼び捨てにしていい女性はこの世界で私と時雨のお母様だけだと思うんだよね」

「こんなんでも立派な教師だから困る。クラスメイトの一人が引きつった笑顔で、

「先生は本当に旦那さんが好きなんですね」

といつと、律は更にテンションを上げて今度は熱弁を振るい始めた。

「好きなんてレベルじゃない。もはや我々は魂同士で結びついているというレベルだ。

たとえ、この世界が多元世界の一つだと過程しよう。だが、私は断言する。どの世界においても

私は時雨と結ばれる運命を選択するだろ。もし、選択しなければそれはもはや私ではない他の何かだ！」

律はそう熱弁を振るひ、もはやエエ等どつでもよせそつに教室の外へ出て行こうとした。

そして、ふと止まり思い出したように教室の扉をドアを開けた。そこに居たのは先程の生意気な中等部の生徒。

「いや、すまない忘れていたよ。皆、今日からこのクラスに転校してきた、天美命だ。仲良くしてやつてくれ」

そう律に紹介されると、先程までの威勢は何処へやら人懐こいそんな笑みを浮かべて天美命は挨拶を始めた。

「はじめまして。今日から転校してきた天美命です。よろしくお願ひします！」

「一二一二！」笑いながらクラスを見渡す命。そして、蒼一と田が合った瞬間、

「あーーー！ アンタ朝から爆走してた田つきの悪い男ー！」

「何だお前、同級生だったのか。チビすぎて年下だと思っていたわ」

実際、本心だった。命も命で図星を突かれたのが気に入らないようでのうぬぬぬと唸り、にらむ。

蒼一も負けじと睨み返した。すると、ようやく状況に追いついた律がやれやれと手を広げた。

「何だ蒼一。もう転校生と知り合ひだつたのか。丁度お前の隣が空いてるし、面倒を見てやる事！」

ちなみに、転校生を見捨てるよつたな真似をしたら、薙刀で尻を百回は私は殴つてしまつだろ！」

もはや脅迫の域だ。だが律はやる。絶対にやる。そんな確信があつたので、蒼一は

「わかりました……」

とじつにか仏頂面を作つてそつ返事をした。

「どういふ事なのー?」

「喋つたほつが身のため!

HRが終わるや否や、遙緋と由加が詰め寄つてきた。何でこの二人に怒られなければならぬのだろう。

蒼一はやつ思つたが、反論しても無駄そうなので諦めたよつて朝あつた事を話した。

よつやく一人の誤解が解けただろう。そう安堵するが、何故か遙緋と由加は転校生の話題にはもつ触れなかつた。

「梨香ちやん……油断も隙もない」

「食料で釣るとはルール違反」

「お前、何話してんだよ……」

一人の会話は聞こえなかつた。すると、由加と遙緋は何時もの様子に戻り、再び話題を戻した。

「いやー」めんじめん。どつかの神璽君みたいにお兄ちやんが早速転校生チェックしたかと思つちやつてさ。
いくらなんでも、お兄ちやんがそこまでクズなわけないよねー。うん。妹として安心した

「全くだよ。神璽みたいのと一緒にして」めんね。蒼一

「いや、俺はいいんだけどよ……」

蒼一は教室の隅で落ち込んでいる神璽を氣の毒そつに見る。心なしか、何時もよりも金髪が褪せて見えた。
だが、由加は神璽の下までカツカツと歩き、首を掴んで引きずつて戻つてくると、神璽に問つた。

「それで、転校生についてじままで知つてゐるの?」

「ああ、彼女は天美命。」この前まであの名門神代文学園に通っていた生糸のお嬢様だ。

家族構成は兄が二人に姉が一人。両親とは死別していて、兄妹で莫大な財産を受け継いだみたいだ。

そんな天美家の末っ子がどうしてこんな高校に来たかってと。どうやら姉と喧嘩して家出同然みたいだぜ」「

「そういえば、お前はそういう奴だつたよ……」

そうだったと蒼一は頭を抱えた。榛名神璽はそういう奴だつた。先程までの落ち込み具合は何処へ行つたのか、テンションマックスで律と共に教室を一旦出て行つた命を待ちわびている。

「はつやくこないつかなー！」

わくわくしていた神璽だつたが結局、命が戻つてきたのはチャイムが鳴る直前だつた。

学級委員たる由加の号令の下、その時既に神璽は自分の席に強制送還されており、

今は蒼一を射殺すような目で睨んでいる。それを軽く流し、蒼一が外を向いてグランドを眺めていると、

「ちょっと、教科書見せてよ」

「机の上に乗つてゐるから、勝手に持つてけ」

今は命より外の風景を見てるほうがいい。夏の日差しが照りつける午前の校庭。その向こうの町並み。

綺麗で平和な光景だ。命は撫然としながらも、蒼一の机から教科

書を取ると授業に集中し始めた。

（飽きた……）

ものの十分ぐらいで平和な光景には飽きが来た。 そろそろ授業を受けようと思い、 椅子だけを

命の方へと移動させ、 斜め横から教科書を覗き込む。 すると、 命はつとおしそうに蒼一を睨んだ。

「こきなり何よ」

「俺にも見せろって」

「見せるからもう少しあつち行きなさいよ」

「つーか、 そもそもそれは俺の教科書だ！」

ぎやんぎやんと言い合い、 蒼一と命は教科書を取り合つた。 もはや一人に勉強する意思はない。

一人に共通していたのは、 コイツにだけは負けたくないという思い。 その思いは高ぶり続け。

ついて一人が同時に武力行使に出よつとした途端、

「お前達、 ちょっと外で立つてなさい」

引きつった笑顔を浮かべた律の拳骨が炸裂し、 いがみあつていた一人は仲良く廊下に立たされた。

「ぐつ……足が痛え」

「アンタの所為よ……」

蒼一と命は疲れたような声を発した。といつのも、立たされた後の一時限目も二時限目も四時限目も

一人は何かといがみ合い、張り合つたのだ。体力は限界に達し、今は栄養補給も兼ねて

律に言われた通り、命の面倒を見るため、更には学校案内も兼ねて学食べと向かっているのだ。

「つかよお。何で俺らこんな初日から張り合つてんだ？」

「知らないよ……私だつて、別にアンタともめたいわけじゃないよ。普通に生活したいだけ」

「やうか……じゃ、もつめんどくさいから休戦な

「うん。私も流石に疲れたよ。ま、改めてようしくね。えっとアンタ名前何だっけ？」

「千島蒼一だ。んで、後ろからこいつそり見てる馬鹿は千島遙緋。俺

の双子の妹」

「よくあんな尾行の仕方でバレてないと思つてゐるよね。私は天美命。
よろしく」

一人は振り向かずにガラス越しに背後の物陰から顔を出している
遥緋を睨みつけると、学食へ向かつた。
食券の買い方や、お勧めメニュー等を紹介していると、何時もの
面子が白々しい顔でやつてきた。

「よお、もつかくれんぼは終わりか」

若干の怒りを込めて蒼一が遥緋に言つと、遥緋は口を逸らして口
笛を吹いた。どうやらバレてないと

思い込んでいたらしい。由加も神璽も口を合わせない所から、同
様なのだろうと判断した。

すると神璽が一步前に出て、命にビンからともなく取り出した花
束を渡した。

「俺、榛名神璽。16歳。身長178センチの今一押しのラッキー
ボーイさ。

人は俺の事をこう呼ぶんだ。舞浜の白き貴公子と。とこうわけで、
今日の放課後どうか行かない?」

一気に周囲の空気が悪くなつた。命は笑顔を引きつらせ、

「うん。学校終わつたら病院行こうか」

「つしゃあああああああー! 病院で何する? はつはーん。わか
つたぞ、お医者さん!」つーだな!」

ビシッと指を突きつけ神璽は楽しそうに小躍りした。それにイラつきたのか、由加が神璽を蹴り飛ばす。

哀れ神璽はラグビー部の先輩方の群れに激突、玉碎、おばちゃん先生を押し倒し、悲鳴が学食に響いた後、体育教師に拳骨をくらつて生徒指導部屋へと引きずられていった。それを見て命は、

「台風みたいな人ね……」

と呟く。その場に居た全員が同意を示した。そして、場の空気をとりなすように遙緋は言った。

「どりあえず、天美さんの歓迎会も兼ねて皆でお昼食べようよ」

「賛成。天美さんもいい？」

「ええ、いいですよ」

先程までとは違い、優しく命は微笑んだ。そして、皆で食券を力ウンターに出しに行こうとする

ドタドタと足音が聞こえた。見ると、長い黒髪の女子生徒が猛スピードでこちらへ向かってきていた。

「あ、」

「秋月先輩！？」

彼女の名前は秋月罪歌。とんでもない名前を持つ、蒼一達の所属する図書部の部長である。

ちなみに由加も神靈も一応は部員であった。春に勧誘されて入つて以来の付き合いになる変な先輩は、よっぽど急いでいたのか、ぜえぜえ息を吐きながら蒼一の手を掴むと、

「全員ついてきなさい！」

「いい、再び猛スピードで走り始めた。罪歌は力が強いので蒼一はなすがままに引っ張られていく。

それに由加が仕方ないとばかりに続き、遙緋は命をチラリと見た。そして、

「天美さんもくる？」

「いいの？」

「勿論。あの人達何でかすかわかったもんじやないからさ。協力してくれるかな？」

「うんー。」

命は強くそう頷くと、遙緋と共に蒼一達を追いかけ始めた。

そして、五人は図書部の部室である、屋上入り口付近のところに辿り着いた。

雑多に本が積まれており、中心には五人は座れそうなぼろつちいソファーが二つとパイプ椅子がその辺に立てかけられている。罪歌は本以外を蹴飛ばしてようやく止まる

と、蒼一の手を離した。

「蒼一、ついに解読したわよー。」

「ま、マジですか。それ、昨日言つてた本物らしい魔道書つすよね

「そうよ。昨晩ずっと寝ないで解読し始めて、やつをひきやく解読に成功したってわけよー！」

罪歌のテンションは高い。見ると、髪はボサボサで目の下にもクマがある。

本物の魔女みたいだ。と蒼一は思つたが、本氣で殴られそうなのでそつと心にしまつた。

それと同時に、由加が部屋に入つてきて最後に遙緋と命が入つてきた。罪歌は見ない顔の命を見ると、

「貴女、本は好き？」

と聞いた。命は暫く黙つて俯いていたがようやく顔を上げる。何故か、その表情は赤い。

「実は、舞川舞さんとか結構……」

「はっはん、なるほど。あの恋愛小説の神様のような人ね。良いわ。良いわよ。

というわけで、遙緋。彼女の入部届けを本田四時までに律先生にしておきなさい

「わ、我まだ入るとは……」

命が抗議の声を上げたが、もつ既に罪歌は聞いていなかつた。持つていたぼろつちい本を高く掲げ、とても良い笑顔で、最高に不吉な事を言い放つた。

「じゃ、魔道書の実験を始めるわよ」

「先輩。また危険な実験ですか？ だつたら人柱に神靈を連れてこない」と

「それは好都合ね。今回は恋愛関連の魔道書だから。彼が居たらしょうもない結果になるわ」

恋愛の魔道書。それを聞いてその場に居た蒼一以外の人間全てが様々な反応を見せた。

蒼一は冷静に、罪歌が何時になくテンションが高いという事を冷静に観察していた。

「んで、恋愛のどんな魔道書何ですか？」

「あ、それわからなかつた。とりあえず、呪文だけはわかつたのよ

「それ、凄い危険なんじゃ……」

「だから、蒼一に使って貰うんじゃない。あんた、恋愛なんてこれっぽっちも興味ないんでしょ？
だったら、良い機会よ。そういう人間には全く聞かないらしいし、あんたもちょっとは青春ぐらいしなさい」

「はあ……」

「もしかしたら、蒼一にも恋つてものがわかるかもね」

その言葉がダメ押しだった。何処かよそよそしい笑顔で遙緋と由加までもが使用を薦めたのだ。

その真意に気づかず、蒼一は自分がそこまで浮世離れした人間だと思われているのかとショックを受けた。
でも、表には出さない。罪歌からぼろぼろの本を受け取り、

「あらわでかってどうじゅきおつて唱えなさい」

「無理っす」

罪歌の拳が炸裂。蒼一は痛みに耐えながらぼそつとした声で、先程の呪文を唱えた。

正直、魔道書と言われてもそこまで信じてはいなかつた。ただ、罪歌とこうやつて本について語り合つのが蒼一は好きなのだ。で、今回も失敗して由加と神靈と遙緋と一緒に馬鹿話をまたするというのが口課だつた。

だが、今回は違つた。本が本当に黒い光を放ち、ブルブルと震えだした。

「成功だわー！」

罪歌が歓喜の声を上げるが、蒼一には笑えなかつた。本は振動を超え、バタバタと動き始めているからだ。

ついに、蒼一の手から本が離れた。本は華麗に部屋の中を飛び回り、最後にページを開くと蒼一の顔に張り付いた。

「うべつー！」

そして、本はすぐに蒼一から離れたと思つと、そのページの中から何と女の子が窮屈そうに出てきた。

初対面だろう。見た事が無い。だが、蒼一は彼女を知つていた。覚えていながら、知つていた。

「毎度御馳還ありがとうございます。私、恋愛を司る神、アカネと申します。あらあら、随分と懐かしい顔が揃つてますね」

「この日から、再び始まった。

蒼一と遙緋の忘れ去られた過去。覚えていないのに知つてゐる恋愛の神、アカネ。

春が終わり、夏が始まろうとしているこの季節。蒼一の明日は何処へ向かう

緋色の眼～LOVE×LIKE×LIFE～

今、始まる。

続きません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7941k/>

緋色の眼～LOVE×LIKE×LIFE～

2010年10月19日02時15分発行